

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成22年度農作物病害虫発生予察情報について

平成22年度農作物病害虫発生予報第13号を発表したので送付します。

平成22年度農作物病害虫発生予報第13号

平成23年 3月18日
徳 島 県

I. 果樹

果樹共通

果樹カメムシ類

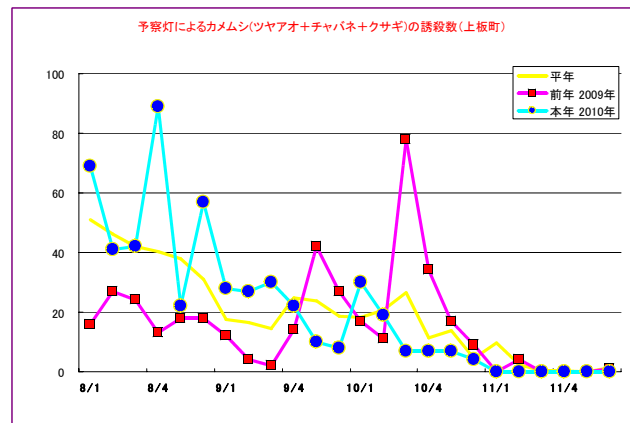
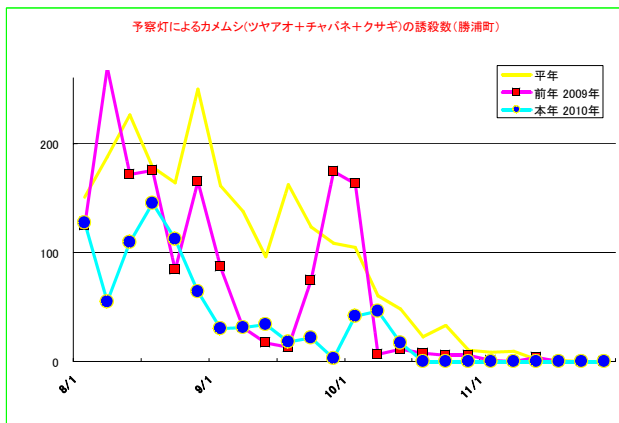
1) 予報内容

発生時期 平年並～やや遅い

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 前年夏～秋期における予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年並～やや少なめで推移した。



(2) 2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2ヶ所調査)では越冬虫を確認できなかった(昨年は11地点×2ヶ所の調査で2地点で越冬を確認,越冬成虫数は0.09頭/m²,一昨年は11地点×2ヶ所の調査で2地点で越冬を確認,越冬成虫数は0.23頭/m²)。

(3) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.1%、発病度が0.2)。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、発病度が1.0であり、ほぼ平年(43.3%、6.7)並の発生である。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が31.9%、発病度が3.7)。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20～25℃の比較的低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が25.0%、寄生葉率が3.5%であり、平年(38.1%、6.2%)並の発生である。優占種はオンシツコナジラミである。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているため、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が18.0%、発病果率が1.1%)。

(2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

(2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率が3.5%であり、ほぼ平年(70.0%, 19.0%)並の発生である。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.0%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、寄生葉率が0.3%、被害果率が0.0%であり、ほぼ平年(12.0%, 0.6%, 0.0%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.0%、寄生葉率が0.6%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生量は「少～中」

2)予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が83.3%、発病葉率が13.7%であり、ほぼ平年(61.8%, 11.3%)並の発生である。

(2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3)同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が 6.2%、発病果率が 0.6%)。

(2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3)発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(5)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1)予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生量は「少」

2)予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率が 3.8%であり、ほぼ平年(60.8%, 17.7%)並の発生である。

(2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3)防除上注意すべき事項

(1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意

する。

- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が2.5%、寄生葉率が0.03%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が6.7%、寄生葉率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、寄生葉率が1.8%であり、ほぼ平年(18.8%、1.5%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ハウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.5%、発病度が0.5)が、持ち込みによる診断依頼で発生が確認されている。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 品種は、本病レース1～7に抵抗性があるものを利用する。
- (2) 葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。
- (4) 薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (5) 罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため、速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では発生圃場率が87.5%、発生程度指数が3.3であり、ほぼ平年(61.1%、4.1)並の発生である。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているため、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が4.9%、発病葉率が0.2%、発病果率が0.4%)。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (4) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が7.1%、発病果率が0.3%であり、平年(8.0%、0.4%)並の発生である。
- (2) 3月18日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ晴れの日が多い見込みであり、気温は平年並～低い、降水量は平年並～少ない、日照時間は平年並～多いものと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。

(3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、一部に多発生圃場が見られたものの、発生圃場率が35.7%、寄生株率が5.7%であり、ほぼ平年(11.5%、1.7%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が42.9%、寄生葉率が10.9%であり、平年(40.2%、6.5%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

III. その他

1) 1ヶ月気象予報では、気温が低く、日照時間が多い傾向と予想されており、施設内外での温湿度の格差が大きくなるものと思われます。施設内の換気等の管理を適切に行なって下さい。

2) 水稻の育苗や甘藷の圃場準備等が始まり、農薬を使用する機会が多くなる時期です。農薬による危被害、事故等を防ぐためにも、使用時には周辺環境に配慮した上で取り扱うとともに、使用残農薬、廃液等は適切に処分して下さい。水田に薬剤を使用したときは、7日間以上止水して下さい。

3) 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病虫害防除所

テレフオンサービス：0883 (26) 1199

U R L : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/boujosyo/>

○ 病虫害の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。

